

もど子と人婦

號八第卷四第

鐵橋破壞

やまとの翁

さても、我が勇武なる皇軍の向
ふ所、攻めて抜かざるはなく、
戦うて勝たざるはなく、さしも
に、難攻不落と頼んだ敵の要塞
旅順口も、一月ばかりの重圍の

後、我が、陸海軍の總攻撃に由つて、僅かに一日の中に、敵艦隊
 は全滅し、要塞内三萬の敵軍は、或は戦死したり、或は白旗を持
 ちて、或が軍門に降参を願ひ出で、是に全く陷落し要塞の各砲
 臺には、今は旭の御旗が幾流となく、海風に翻へつて居る。
 之より前、敵の大將黒鳩公は、部下の名將、スタケルブルグ中將
 をして、二師團の兵を率ゐて、旅順の危急を助けにやつたのであ
 るが、我が奥將軍のために、得利寺といふ所で、散々に打ち破ら
 れて逃げて歸つたのであった、我軍は逃ぐるを追うて、蓋平を拔
 き、營口牛莊を取り、遂に、大石橋に、黒鳩公の大軍を物の見事
 に撃退したのは、丁度、旅順口の陷落に先きたつ事、一週間程で
 あつた。そこで、遼東半島は、もう悉く日本の占領する所となつ

て、露兵の片影だも見る事は出来ない。

旅順の陥落、大石橋で黒鳩公の大敗の報知が、露都に聞えると、さあ上も下も大變な騒ぎとなつて、大急ぎで以て、先づ二十萬人の援兵を送つて、黒鳩公を助け奉天附近で、勝ち誇つた日本の大軍を支え、こゝで一大激戦を試みて、連敗の大勢を盛り返さうといふ計劃を定めた。

黒鳩公は、大石橋で大敗してから、殘兵を引きつれて遼陽をすて奉天に退き、こゝに各所の敗兵大凡二十萬人許りを集中し、連勝の日本軍と一大決戦をやらうとするのであるから、夜を日についで、地雷だの、鹿柴だの、鐵條網だの掩堡だの、さまざまの防禦工事を急いで、一方に於ては、本國から來る二十萬の援兵を今か

く　と待　つ　て居　る。

我　が　軍　は、第　一　軍　は　右　翼　に、第　二　軍　は　左　翼　に、第　三　軍　は　中　軍　に　備
 へ、其　兵　合　せ　て　三　十　万　人、遼　陽　を　中　央　と　し　て、右　は　太　子　川、左　は
 遼　河　の　域　に　沿　う　て、蜿　々　と　し　て、長　蛇　の　如　く、天　を　衝　く　が　如　き　意
 氣　を　以　て、奉　天　の　敵　本　營　を　壓　し、機　を　見　て、三　面　一　時　に　合　撃　し　よ
 う　と　す　る。

開　戦　以　來　の　連　敗　に、三　軍　の　意　氣　甚　だ　し　く　消　沈　し　た　り　と　は　い　ふ　も　の
 へ、元　來　世　界　強　大　國　の　隨　一　と　い　は　れ　た　露　國　軍、嘗　て　は　自　分　か　ら　都
 を　焚　い　て、世　界　の　一　統　を　企　て　た　ユ　ル　シ　カ　の　英　雄、彼　の　奈　破　翁　を　さ
 へ、苦　も　な　く　大　敗　さ　せ　た　位　だ　か　ら、其　意　氣　の　今　で　も　尙　失　せ　な　い　も
 の　が　あ　る。殊　に、此　決　戦　に　敗　れ　た　と　來　て　は、亞　細　亞　の　方　面　で　は　勿

論の事、多年雄視した歐羅巴での位置も、全く失つて仕舞はねばならぬ事であるから、この戦こそ、眞に、露國の全運命の係る所といふので、夫はく非常な決心なものである。

日露の大軍は、かくて兩々相對峙し、危機一髮滿州の大平野は忽ちの間に、修羅の巷にならうとして居る。

かゝる間に、某月某日を以て、露本國からの援兵二十万人ハ爾賓に到着するといふ事が分つた。夫で、此援軍が、奉天に着かない中に、一舉して、敵を鏖殺にして仕舞はうといふ目的で、我軍は、敵援軍のハ爾賓に到着する數日前に總攻撃を開始した。そこで、兩軍、五十萬、前古未曾有の大激戦が始まつた。敵も數に於ては少いが、此一戦で、開戦以來連敗の大勢を盛り返さうといふ決心

である上に、防禦工事は中々嚴重に出来て居るので、其抵抗は頗る頑強を極め、容易に陥落し相にもない、かくして、彼は、本國からの援兵の到着するまで、陣地を固守しようといふのである

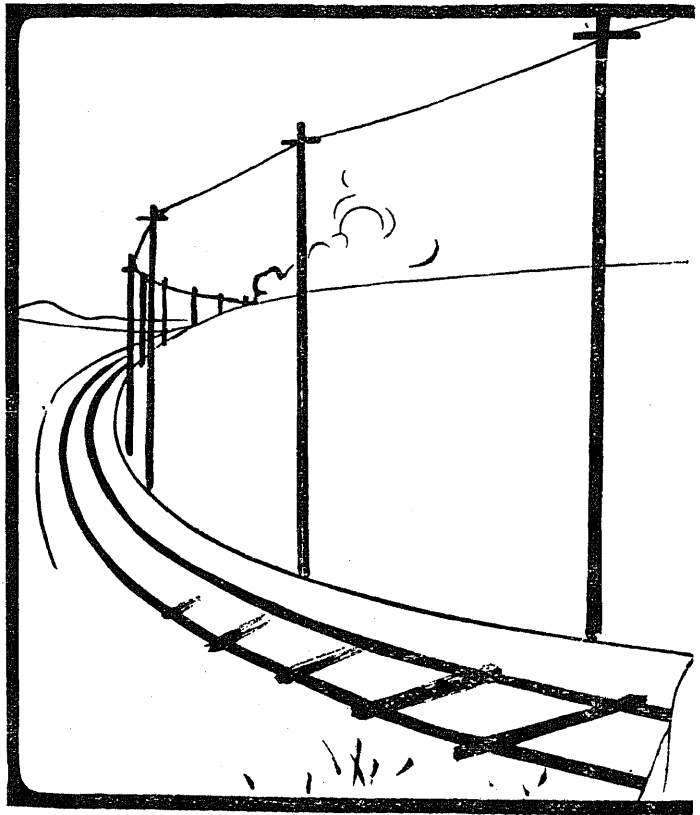
* * * * *

此大戦争が始まる數週間前に、北京から汽車でやって来て遼河の上流で、下りた二人の支那服を着た僧侶が在った。



大
其抵抗は頗る
彼は、本國

大抵は無言で歩いて居るが、物言ふ時には巧みな支那語を使つて居る。知らない西洋人等が見ると、誰でも、支那の僧侶だとしか思ないが、其炯々たる眼光、其眉宇の間に溢た敢爲の氣象等から見るとは、吾々日本人には、誰でも是は、尋常の支那の僧侶でないことが分る。さて、此二人の支那僧は、哈爾濱の方向に向つて、鐵道に沿うて、



しきりに道を急いで居る、尤も途中、至る所で、露西亞の哨兵から、再三咎められたが、いつも、布教の爲め、滿洲を旅行する僧侶だといふので逃れて居る。やがて、日數過ぎて、或日の暮れ方遂に、松花江の鐵橋に到着した。

此松花江といふのは、滿洲中での大河で、北に流れて、黑龍江に入つて居るが、哈爾濱から旅順に至る汽車は、この鐵橋を渡つて居る。彼の二人の僧侶のこゝに到着した晩は、正に奉天附近で、彼我五十萬の軍勢が、入り亂れて、烈しく砲火を交へて居る時であつた。僅か、二三十里を隔て、南には、あまたの人々が、互に生命の取りやりをして銃砲の響や、劍戟の光り凄まじい有様であるにこゝ滿洲の平野を流るゝ、松花江の夕景色ののどけさ、沈んだ

夕日の影で紫色になりかゝった向うの森に向って、夕鳥が二三羽飛んで行くのがある、近く足許の芝生の上には、四匹五匹の豚や牝牛が牧童に引きつれられて、家路に急いで居る、彼の二人の僧侶は、こののどかな自然の景色を見て、暫しは深き感慨に沈んで居た様だったが、やがて、進んで行くともなく、引き返すともなく、其邊を徘徊して、夜の深くなるのを待って居る様であつた。

其夜もやうやう更けて、一時頃、鐵道線路警戒の役目を以て鐵橋附近を巡廻して居った一人の露國憲兵が、闇をすかして遙か向うを眺めては耳をすませて居たが、何を見つけたのか、ポケットから、呼子を出すや否や、狼狽たゞしく吹き立てた。夫といふので



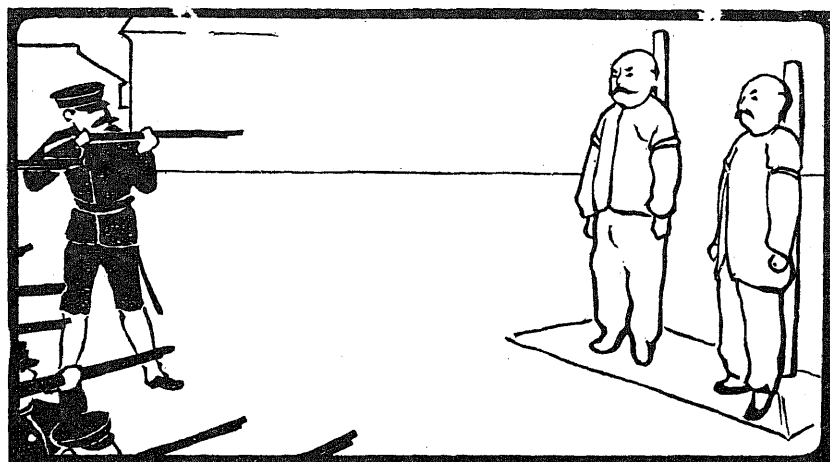
そこ、こゝから、二人三人づゝ
 の憲兵が顯はれて、忽ちの中に
 二十人餘り、闇を破つて怪し
 の者を追つかけた。

* * * * *

丁度、其時、哈爾賓を發した汽
 車は、數十の客車に、幾万の兵
 を搭載し、この鐵橋に向つて進
 行して來た、この兵といふのは、
 即ち露本國から發した二十万の
 援兵の先發隊で、今や哈爾賓か

らして彼の奉天の合戦の眞最中に向つて進軍して來たのであつた。
 やがて、松花江の鐵橋まで來て、機關車は、今や此方の川岸に付
 かうとした時、爆然として、天地も破れん許りの響と共に、鐵橋
 は眞中から眞二つに割れたと思ふと、續いて、幾十の客車は幾万
 の兵隊を搭載したまゝ、轟然と、川の眞中に、折り重なつて落ち
 こんで仕舞つた。

奉天の露軍に於ては、しきりに援兵の來るのを頼みにして、我が
 大軍を引き受けて防いで居つたが、何時までたつても援兵は到着
 しない、其中に、各砲臺は、たんに略取せられる、とうとう
 力屈して、丁度、彼の汽車顛伏の起つた翌日の晩、全く、陣地を



棄て、潰散した。我軍は、三面とも
 どこまでもと、追撃したので、露軍の
 斃ゆゝもの數を知らず、捕虜は師團長
 以下將校數百名、下士以下は無數、敵
 將、黒鳩公もやつとの事で哈爾賓まで
 逃げ歸つたといふ古今無比の大勝利と
 なつた。

* * * * *
 この戦争が濟んでから、大方一月も過
 ぎて、哈爾賓の露の本營の軍法會議に
 附せられた、二人の支那僧があつた。

二人とも、彼の恐るべき汽車顛伏の際、露國憲兵に捕まって綿火薬を装置して鐵橋を破壊したといふ嫌疑で以て、こゝに送致せられて、嚴重なる軍法會議に附せられることになったのである。この鐵橋破壊、列車顛伏によりて、多數の兵士を川底に葬つたのみならず、本國からの援兵をして、奉天の大激戰の機に後れしめ、従つて、露の滿洲軍は恢復すべからざる大敗北となつたのであるから、この二人の僧侶の行爲は非常に重大な犯罪だと考へられた。最初は、露國の役人どもも、皆支那人だと許り思つて居たが、だんく取調べた末、どうしても、日本人に違ないと斷定せられた。

然し、この勇敢なる二人の日本人は、如何なる取調を受けても、

どこまでも知らぬ存ぜぬで通しきつたので、この取り調べは遂に
 分らずに終ったが然し、鐵橋破壊だけは二人とも最初から申し
 立てゝ居るのだから、然らばといふので、遂に死罪に決められた、
 夫でも、何れ、日本の豪い志士に違ないからといふので、將校の
 禮を以て、某日遂に銃殺の刑の下に、此二人は從容として、奉天
 の大勝利を祝し、大日本帝國の萬歳を唱へながら死に就いたとい
 ふ事である。